

2月中旬、東京・日本橋とやま館で「とやま伝統工芸ジュエリープロジェクト」による作品が展示されており、見に行きました。伝統工芸に携わる職人とジュエリーメーカーとを結びつけ、両者の協業により新しい宝飾品を開発するというプロジェクトで、富山県が支援しています。

ジュエリーメーカーの「桑山」と組んだのは三社。高岡銅器の着色を手掛ける「モメンタムファクトリー・Orii」、かざりかなぐ 鍍金具の「しろがね屋裕翠」、螺鈿・蒔絵の「武蔵川工房」です。各社の若手職人が伝統技術の腕を発揮して作ったジュエリーは繊細で美しく、おみやげ工芸品に転ばない本格派のジュエリーを目指した心意気に、とても好感を持ちました。

このコラボレーションを世界に向けて展開していただきたいと願っていますが、今は新しい意匠を凝らしたジュエリーがあふれかえる時代。そのなかでどのように際立ち、独自の価値をアピールするかが問われていくと思います。

このジャンルの成功例のひとつに、「金継ぎ」を活かしたジュエリーがあります。1月にはイタリアの高級宝飾ブランド「ポメラート」が、日本古来の職人技術「金継ぎ」を施した一点もののジュエリーを発売し、話題になりました。金継ぎとは、壊れた部分を漆と金粉を使ってつな

Kaori Nakano

中野香織

「ファッション歳時記」

115

ジュエリーには、詩情を



(左上から時計回りに)しろがね屋裕翠、武蔵川工房、モメンタムファクトリー・Oriiが桑山と完成させたジュエリー。とやま伝統工芸ジュエリープロジェクトの展示会は、4月25日(日)まで県民会館1階の「D&DEPARTMENT TOYAMA GALLERY」で開催中

ぎ合わせ、修復部分を柄のようを見せてしまう技術で、15世紀の足利義政時代に生まれたとされます。

この技術を使ったジュエリーがニュースになるのは、世界で共感を得られる思想があるからです。壊れたものを修復し、以前よりも価値を高めてその命を輝かせ、という思想。洋服に対して機能や利便性が求められる時代において、ジュエリーは単なる装飾というよりもむしろ、個人の内面と響き合うお守りやパワーアクセサリーとしての意味合いをいっそ

う強めています。傷を回復させ、以前よりも輝かせるという思想は、憧れと共感を得られます。しかも一点ものとなれば稀少価値も高い。職人技術を保護する姿勢も、サステナビリティを考慮すべき時代の要請にかなっています。

ストーリーがあることで、ジュエリーはより深く個人の内面に訴え、ゆえに着ける人を輝かせるのです。大雑把ざっぱに引き合
いに出すことをお許しただければ、金属
属着色ならば、「あなた自身と化学反応
を起こして生まれる唯一無二の色」といっ

たストーリー。鏝であれば「神社仏閣に神秘の権威を与えるように、あなたにもオーラを」という隠れコンセプト。螺鈿なら「貝が内側に秘める七色の輝きのよう
に、七色のあなたが生まれる」という誘惑ワード。こうした情緒を盛り込むことで、ジュエリーは本来の力を発揮します。単なる伝統技術コラボに終わらせず、人に勇気や品格やステイタスの感覚を与えてきたジュエリーとしての意味を大切に、マーケティングを成功させていきたいと願っています。

ついですが、展示会の名称もプロジェクトの名前そのまんまではなく、「メティエダールとやま」、「サヴォアフェールたかおか」のようなふくらみのある名でもよかったですか。「芸術的仕事」「匠の技」という意味です。心に働きかけるジュエリーには、若干のミイハー色、もとい、ポエトリー(詩情)が必要なのです。



なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「[インパター]で読むアパレル全史」(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)ほか多数。